

「岩波書店」の月刊誌『世界』の「読者談話室」は社会の出来事を論評、批判するだけでなく、読者たちの具体的に経験、体験した談話を寄せているので、興味深く、説得力がある。7月号の二人の寄稿に深く賛同を覚えた。

武田かよ子氏は「政治家は子どもに手本を示せ」と題して、政治家たちの言動に疑問を投げかけている。彼女はエリート進学校に勤務している教員である。近年、生徒たちの「荒れ」がひどい。校内暴力ではない。授業は熱心に受け、試験勉強も励むが、根本的な学び、人生に対する態度が何か違ってきた。政治家たちのヤジや失言をアレンジして「国会で〇〇さんが言っていた」と責任転嫁する。交換留学生に「二重国籍」とあだ名をつけ、「ヘイトスピーチ条例で訴えないで」と発言する生徒がいた。民進党の代表・蓮舫氏は二重国籍を問題にされた。ヘイトスピーチは止むことがない。別のクラスでは、癌から復職した教員に対して、「働かなくていいぞ」とヤジが飛んだ。三原じゅん子氏が発言している時、大西英夫氏が飛ばしたヤジを真似て、教師に向けた訳である。付属中学校の生徒たちが、社会見学で訪れた博物館で係員（学芸員）を指して「この人たちは癌だから」とあっけらかんと言ったのけた。学年主任を含めた全担任が総出で謝罪したが、学芸員の方からは「実はほかにも何校か似た発言をされて困っている」と打ち明けられた。文化も芸術も理解せず、金儲けしか考えない山本幸三地方創生相の言葉を、そのまま、言った訳である

更に、ベテラン女性教員には「（宿題しか）産めないのか」と言い、クラスの実権を握る子どもたちは「修学旅行の行先は、俺らが強行採決しよう」と言う。政治家たちの愚劣な言い回しを、茶化した発言に言い換える。本人たちはパロディのつもりかも知れないが、人権侵害の意識は全然ない。他者への尊敬と配慮を持つ子どもが多いと思うが、日本全体が大きく変わり、民主主義や弱者への優しさが消えうせた現在を、子どもたちは敏感に感じ取り、そういう社会に適合しようとしている風潮がある。身近な大人が、このような風潮から子どもたちを守らなければならない。武田氏は、「本来、すべての人の見本となるべき政治家だということが、愚かしくも悲しい」と結んでいる。

会社員の佐藤太一氏は「いじめを是とする空気」と題して、福島原発事故によって、県内外に避難した子どもたちが「福島に帰れ」「放射能が付くから近づくな」などのいじめを受けていることに心を痛めると書いている。松野文科相は、事故被災者へのいじめの事実を認め、「背景には被災者のつらい思いへの理解不足がある」と述べているが、子どもへのいじめ発言は大人社会の空気を反映しているのではないか。「いじめ」という言葉を聞くと、子どもの頃の疼く体験を思い出す。両親が離婚し、母方の実家に身を寄せ、東京から福岡に転校した。標準語で話す彼をクラスメイトは「オカマ」と呼んだ。また、「佐藤の家は父さんがいないからオカマになった」とはやし立てられた。いじめた彼らは覚えていないだろうが、いじめられた側には、色濃く火傷が残っている。

辞任した今村復興相は、自主避難の人たちに「自己責任」の言葉を投げつけたが、本音が出たのではないか。どれほどの人たちが傷付いたことか。佐藤氏は「どうか、どうか、地位ある立場には、せめて人としての想像力や配慮に優れた人を配してほしいものだ」と訴えている。人を押しつけて大臣になったのであろうから、他人への配慮など、望めないのであろうか。子どもへの道徳教育を盛んに言うが、まず、政治家たちの基本的な道徳教育が必要であると思うのは、私だけではないだろう。